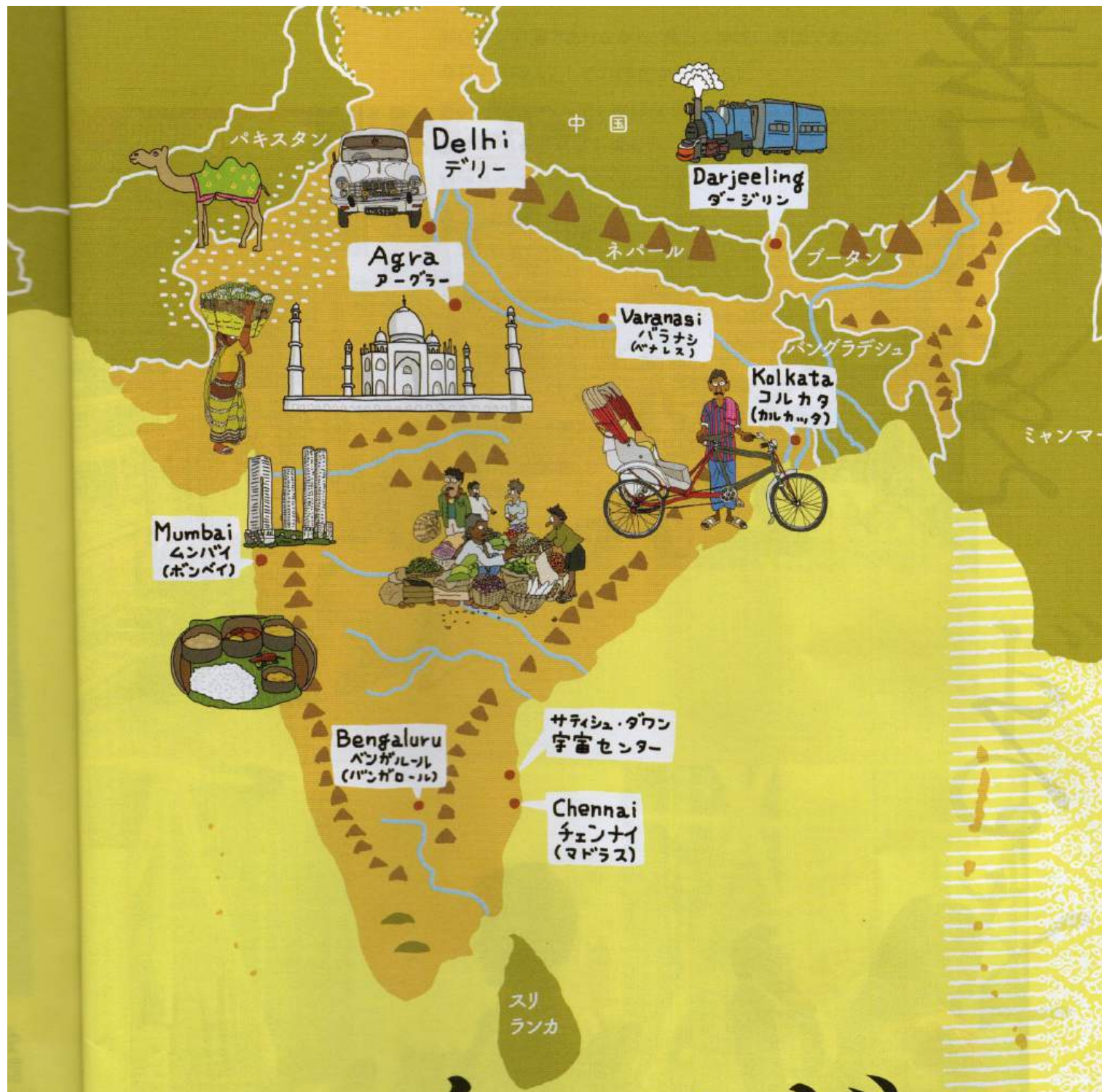




インド

という

国と人々

歴史、民族、宗教、思想哲学などが
重層的に折り重なって存在する国、インド。
4つのキーワードから、その特徴をひもとく。

文＝水島 司(東京大学名誉教授、放送大学客員教授) イラストレーション＝茶畑和也

SAISON
express 6

2024 June

特集

考える インドを

地球好日

カンボジア

アンコール遺跡群

いわく、名宿

石川 加賀市

いま、あなたに会いたい

長塚京三

重要なお知らせ

「SAISON express」は本年7・8月合併号をもって刊行を終了いたします。

詳細はP4目次ページに記載のウェブサイトからご確認ください。

遠くの蜃気楼のような国が

世界に外貌を示しはじめた

インドほど、人を魅了し・毛嫌いさせ、引き寄せ・遠ざける国はない。目を背けさせる貧困と目を疑う豊かさ、やけどする暑さと凍えつく寒さ、神々しいヒマラヤの峰々とアラビア海の夕陽、深遠な哲学と俗っぽいわべ……。何がインドで何がインドではないのか？

ビートルズがそうであったように、インドに足を踏み入れると、人は押し寄せる波にはしごを外され、迷路に迷い込み、宙に浮く。それは、神秘と混沌と不可解さというインドの幻覚作用によるものなのか。

遠くに浮かぶ蜃気楼のようであったインドは、しかし21世紀に入り、世界の前に、明確な外貌を示しつつある。仏教とカレーライス程度のつきあいで済んでいた日本にも、インドの情報が大量に流れ込むようになった。もはや、インドから距離をおくことができなくなっているのだ。であれば、向き合い、相手を知り、つきあう手立てを身につけるしかない。インドとはいったいどのような国なのか。以下、その特徴を列記してみたい。

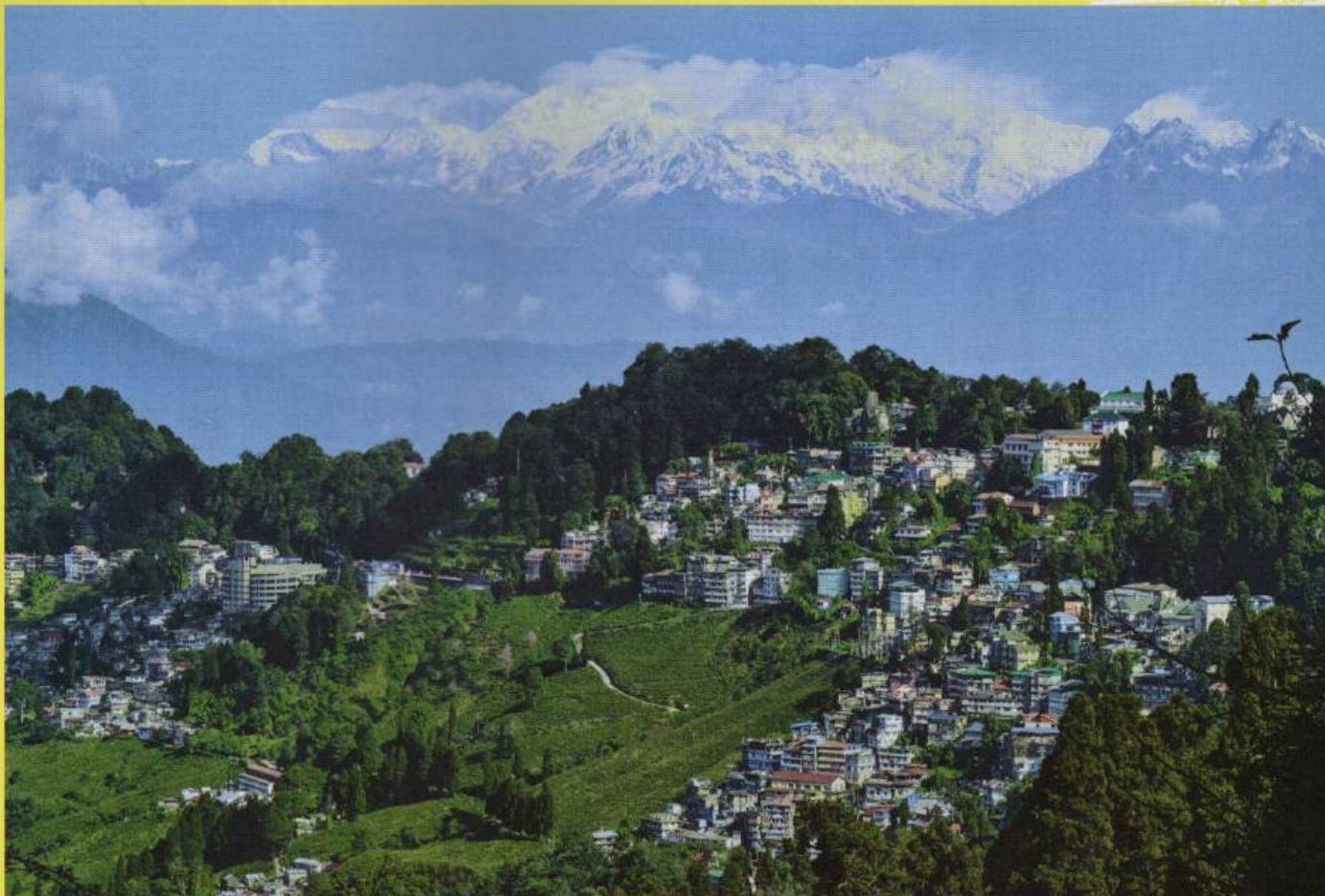


インド北部のアラハバードにて、ヒन्दウー教の祭典クンブメーラに参加する群衆。4つの聖地で12年ごとに開催、聖なる川で沐浴するために数千万人が集まる。

©Getty Images

第一、それは、インドが中庸のない、極端さの集合体だという点である。極端さは、何よりも気候に現れる。インド南部には三つの季節がある。その三つとは「hot, hotter, hottest」。程度の差はあれ、年中、凄まじく暑い。他方、北のデリーは、夏の気温は40度を軽く超え、冬には、底冷えのする寒さが襲い、人が凍死する。西と東は、冬はそれなりに過ぎるが、他の月は暑い。季節の切れ目を感じさせるのはモンスーン。6月と12月に、それぞれ始まる。モンスーンの雨が「失敗」すると12〜3年に一度「失敗」する、インドは水不足と干魃に悩まされ、大当たりすると、木がなぎ倒され、洪水が襲う。過剰と過少の集合体、それがインドである。

第二の特徴は、多様性。言語がその代表であろう。連邦全体の第一の公用語は、話者人口4億と言われるアーリア系のヒンディー語。しかし、その広がりには北部と中央部に限られ、ヒンディー語以外にも、ベンガル語、マラーティー語など、幾つもの言語が話される。他方、南部には、タミル語、テルグ語など、そ



ヒマラヤ山脈を望む
景勝地ダーズリン。昼
夜の寒暖差が大きく、
良質な紅茶の産地と
して知られる。

©Getty Images

デリー近郊の新興都
市ノイダにて、暑い日
に外出する女性たち
(2024年4月)。

©Getty Images



国民が一つの言語で

会話ができない世界

れぞれ数千万の話者を擁するドラヴィダ系諸言語が存在する。ヒンディー語の話者は、南では切符を買えない。数字さえ通用しないのだ。逆もしかり。19世紀のインドには、550以上の藩王国が存在し、イギリスの間接統治とは言え独自の統治が行われていた。13世紀頃からのイスラム勢力の拡大で使われはじめたペルシア語は、外来語ではあったが16世紀からのムガル帝国の下で公用語として使われた。それが公用語でなくなったのは、イギリス東インド会社による植民地支配が開始されて数十年を経た1830年代からのこと。同じく外来語である英語の公用語化は、言うまでもなくイギリス植民地時代に入ってから。公用語とは、多くの話者を持つ言語ではないのだ。

言語の多様性と持続は、さらに、独立前後の言語州設立運動の結果、インド憲法で保証された。地域主義の強固な存在のなかで、言語毎に州を設立せよとの動きが強まり、1956年から1966年にかけて、14の州が生まれた。現在の州の数は29を数える。それらの言語は、独自の文字さえもっている。読みやイントネーションが異なっても、漢字という共通の文字によって理解が可能



南西部ケララ州にある水郷地帯。モンスーンの時期は雨量が多いが、昨年は大幅な降雨不足となった。
©YOSHIHIRO TAKADA/
SEBUN PHOTO/
amanaimages

インドの2000ルピー札。17種類の言語でその紙幣がいくらなのかが記してある。
S Creator / Shutterstock.com



南インドのティルチラパッリ近郊の寺院にて。参道にある店の名がいくつかの文字で記されている。
写真:筆者提供



であった中国とは、大きな違いがある。国民が一つの言語で会話できない世界、それがインドなのだ。

第三の特徴、それは、歴史的な奥深さと相克である。宗教でそれをみよう。現在のインドには、約8割のヒンドゥー教徒、14%のイスラム教徒を主体に、キリスト教徒、シク教徒、ジャイナ教徒、および独立後に改宗を図った新仏教徒が存在する。紀元前1500年頃にインドに進出してきたアーリア人が携えてきたバラモン教は、紀元前5世紀頃になると、厳格な儀礼だけの形式主義に陥っていた。身分の平等を唱え、力をつけてきた商人層を味方につけた仏教やジャイナ教などの新興宗教は、バラモン教が魂の救済からは無縁であると批判する。バラモンとバラモン教は窮地に陥り、次第に影響力を失っていく。しかし、そこから、巻き返しを図り、バラモン教をヒンドゥー教へと変身させていく。すなわち、村々で信仰されていた無数の神々を、破壊と再生の神シヴァや世界の守護神ヴィシュヌを筆頭とするヒンドゥーの神々のパンテオンの一角に組み込んで民衆の支持を獲得する。さらには、儀礼によって王権の正統化を支え、王権の後盾となることで村や土地の寄進を受け、インド社会全体への影響力を拡大していったのだ。

他方、仏教やジャイナ教は、出家修行者のみの救済に傾き、民衆の生きる空間から離れて活動したことから、支持を広げることが失

ヒンドゥー教と 三大神



reddees / Shutterstock.com

維持神
ヴィシュヌ

バラモン教と土着信仰などが結びつき、4～6世紀のグプタ朝時代に発展、定着したヒンドゥー教。特定の開祖や聖典をもたず、自然崇拝的な信仰や哲学など、あらゆる要素を含んだ宗教とされる。多神教であるが、宇宙を創造したブラフマー、創造と破壊の神シヴァ、世界を維持する神ヴィシュヌの三大神が中心で、とくにシヴァとヴィシュヌの人気の高い。

インド歴史年表

〈紀元前〉

- 2600年頃 インダス文明広がる
- 1500年頃 中央アジアからアーリア人の進出始まる
- 1000年頃 バラモン教の最古の聖典『リグ・ヴェーダ』が成立
- 6世紀頃～ 十六王国が割拠し、複数の王朝の興亡が続く戦乱の時代には

5世紀頃 バラモン教に対抗して、仏教、ジャイナ教が始まる

〈紀元後〉

- 4～6世紀 グプタ朝 この時期にヒンドゥー教確立
- 10～16世紀 イスラム勢力が軍事侵攻を繰り返し、デリー政権成立
- 1526年 ムガル帝国が成立し、繁栄する
- 17～18世紀 イギリス東インド会社が進出し、植民地支配を拡大
- 1857～77年 大反乱を経て、イギリスが直接統治するインド帝国成立
- 1885年 インド国民会議が結成され、独立運動へ向かう
- 1947年 インドとパキスタンに分かれて独立し、インドでは国民会議派のネルーが初代首相に
- 1952年 日本とインドの国交樹立
- 1974年 第1回目の核実験を行う
- 1990年代 湾岸戦争による経済危機を経て、保護的経済運営から経済自由化政策へ転換。現在までの急速な経済成長が始まる
- 2014年 ナレンドラ・モディを首相とするインド人民党(BJP)政権発足

敗した。バラモン達は、仏教を激しく叩くことも忘れなかった。そして、仏教は、東南アジアやチベット、東アジアなど、インドの外へと早々に退散した。イスラムはどうか。ムガル朝などのイスラム政権は、確かにイスラムへの改宗者を生み出した。しかし、その影響力は都市部に限られ、ヒンドゥー教の牙城は崩れなかった。キリスト教ミッシヨナリーも、活動の成果はカースト差別に苦しむ最下層からの改宗に限定され、社会全体への影響力は持てなかった。どの宗教にも、擁護者・布教者が控え、互いに相克し、自らの影響力を広めようとした。インドの宗教は、甘いものではなかった。

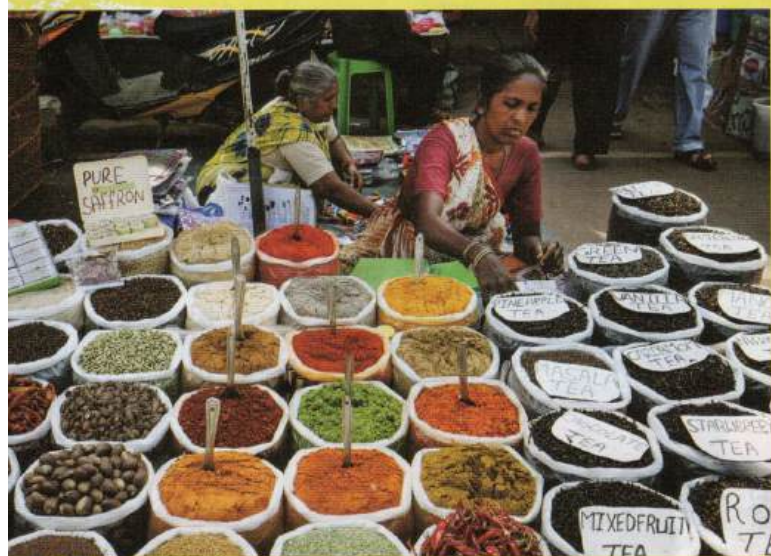
第四の特徴、それは、枠の固さである。身近な食の話題から入ろう。ムンバイの弁当屋は日本でもよく知られる。弁当屋とは言っても、家庭で作られた弁当を集め、勤務先へ届ける、いわば家庭お抱えUberである。なぜ？ それは、インド人の多くが、母親の手料理が最高だとするマザコンだからではない。食の枠が固いのである。インド人は、その生まれたカーストによって、菜食主義かどうかが決まる。たとえばワカメのような海藻も、魚が触れた可能性があるのでダメとなる。なぜ菜食にこだわるかといえば、肉や魚を食するような者は―酒を飲むような者も―、低い生まれと見なされるからである。また、自分より下のカーストが調理した料理は食べてはならない。多くのレストランで、バ



ゴアの街角にあるスパイス屋。インド料理にスパイスは欠かせない。

©Yadid Levy/robertharding/amanaimages

ムンバイのオフィス街。各家庭から集めた弁当を勤務先に届ける配達サービス。 ©Alamy/amanaimages



創造神 ブラフマー



d_odin / Shutterstock.com



OlegD / Shutterstock.com

破壊神 シヴァ

食や婚姻を左右する カーストという制度

食べてはならない。多くのレストランで、バ

ラモンの料理人が雇われるのは、この理由による。弁当が一番だ。食でさえ、枠が固い。結婚となれば、なおさら。基本はあくまで同じカースト同士。女性が自分より地位の低いカーストの男性と結婚したならば、カーストから追放され、社会生活は閉ざされる。現在、欧米には数百万人の在外インド人が暮らし、婚姻の枠の固さを知らぬ現地生まれが続々と増えている。彼らが、枠の固さを知らぬまま、高校や大学で出会い、恋愛関係に陥ってしまうことに、移民一世の親、特に母親は戦々恐々としているという。在外インド人の一部が、インドよりも保守的になっている所以は、そこにもある。

極端さ、多様性、歴史的な奥深さと相克、そして固い枠。こうした構造の中で、インドの人々は、日本人よりもはるかに長い時代を経験し、現在に至り、世界をまたにかけている。21世紀はインドの時代と言われ、それを実感させる動きが確実にある。インドから目を離すわけにはいかない。

みずしま・つかさ

1952年富山県生まれ。東京大学文学部東洋史学科卒業、同大学院修士課程修了。博士(文学)。専門は南アジア史。『前近代南インドの社会構造と社会空間』『インドから』など著書多数。1996年よりNHK「高校講座 世界史」など多くの歴史番組を担当。